



Title	近世の大阪の地図に関するノート
Author(s)	鳴海, 邦匡
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2006, 40, p. 13-33
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6975
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

近世の大阪の地図に関するノート

鳴 海 邦 匡

はじめに

都市図の作成はほぼ近世にはじまり、現在に至るまで数多くの地図が作成されている。こうした都市図の研究は近世を中心にこれまで展開してきた。そこで最も注目されてきたのは板行都市図であった。矢守一彦による「都市図の歴史——日本編」(一九七四)は代表的な日本の都市図の研究書のひとつである。同書に挙げられた都市図の項目をみると、都市図屏風、官撰実測図、城絵図と城下絵図、板行都市図となっており、ほぼ近世のものに限定される。都市図屏風を都市図に含めるかは議論が分かれるが、これらのうち板行都市図に最も多くの頁がさかれている。

この近世の板行都市図は三都を中心に作成された。これに長崎、奈良、堺などが加わるが、何れも幕府の直轄地であった。それは板行都市図が、そこに訪れる、もしくは居住する人々の需要に応じて作成され発行されたからである。江戸や京都では一六三〇—四〇年代頃(寛永期)より、大坂では少し遅れて一六五〇年代(明暦期)より存在

が確認される。これら三都の板行図はそれぞれに特徴が異なっており、それは各地の都市図に対する需要の相違に起因するといわれる。京都のものが最も古く、江戸のものが最も多い。三都のうちで大坂のものが最も少ない。それはこれまでの三都の都市図の研究状況にも反映し、江戸や京都に比べて大坂への関心は乏しい。江戸（岩田、一九八〇）や京都（大塚、一九八一）における板行都市図の目録は整備されているが大坂はない状況である。

一方、こうした板行都市図に対して、手書きによる都市図も存在していた。その中心は、行政上の管理を目的とした地図であり、それらはむしろ板行都市図よりも都市図の基本であったと評価できる。実際、肉筆の都市図は木版の都市図の内容に大きな影響を及ぼす場合があった。三都の場合、京都は大工頭中井家による寛永期の実測図、江戸は北条氏長による明暦期の実測図が有名である。先述の「都市図の歴史」に挙げられた官撰実測図はこのふたつの事例を紹介する。そして、大坂では大坂三郷町絵図（以下、三郷図）の存在が知られる。この三郷図は、近世初期の江戸や京都にみられる実測図の事例ほどは注目されていない。しかし、三郷図は両事例にはない特徴を有している。それは、三郷図が一七世紀半ば以降も継続して作成されているという事実である。この継続性の違いは都市の構造や管理の違いに起因するのではないかと考えられる。近世の都市図の意味を考えるためには、こうした行政用の手書きの地図を中心にみていくべきである。その点、近世を通じて作成され続けた三郷図は注目すべき存在であり、近世の都市図を理解するうえで大坂は重要なフィールドであると考えている。

さて、近世における大阪の地図の研究蓄積については矢守一彦の論考（一九八四）に詳しい（以下「矢守覚書」）。そこでは従来の研究を振り返りながら、板行大坂図のなかでも最大最詳と評価される文化三（一八〇六）年刊「増修改正撰州大阪地図」（以下「文化三年図」）に注目し、その表現上の画期を模索する。そして、その議論の過程で

三郷図の評価も試みる。本稿の主な目的は、このふたつの課題について最近の作業を通じて得た知見を報告することである。

一、大阪の地図の目録

本稿の目的に入る前にこれまで刊行された大阪の地図の資料について少し触れておきたい。この点については矢守覚書に基本的なことを記しており、図録や複製、研究史の紹介を通じて掲載される近世大坂図のリストをあげている。刊行された地図の所蔵目録の名前もあげるが内容には触れていない。そこで、まずは主要な地図所蔵目録の内容を紹介することとした。それは、現時点で大阪の地図の全体像をみようとするれば、それらの目録を参照することになるからである。

大阪の地図は多くの機関に所蔵されており、それらの機関の多くが所蔵資料の目録を作成している。その主なものは末の文献リストに掲載する通りである。そのうち、地図についての総目録を作成したのは、①大阪府立図書館（一九六二）、②大阪市立中央図書館（一九八八）、③大阪市立博物館（現大阪歴史博物館、一九九〇、一九九一）が主要なものである。それぞれを簡単にみてみると、①は「江戸時代」「明治以降」の項目に区分しさらに地域別に、②は「市政・郷土部資料」「朝日新聞社寄贈国内地図（大阪関係）」「地形図（大阪関係）」の項目に区分しさらに地域別（地形図は種別）に、③は地図の種別にリストが載せられる。地域別に地図を分けるのもひとつの分類方法であるが、それでは都市図としての大阪の地図の特徴を掴むのは難しい。例えば、いずれのリストの近世図をみても、板行と肉筆の地図が混在して掲載される。作成された背景に従って地図をみるなら、それらは区別する必要がある

と考える。都市図とは何かを考えるためには、地図の分類の軸をさらに設定していかなければならない。

これ以外にも、大阪府立図書館（および中之島図書館）では、蔵書目録（一九六三、一九七二）や追加図書目録（一九六九）のうちに「大阪府郷土誌」「歴史」「社会」といった項目で、大阪府立中央図書館の蔵書目録（一九八三）では「地名・地図・絵図」「災害・防災」「河川・治水工事・発電工事・ダム」「港湾工事」「都市計画・宅地造成」といった項目に地図が散見される。こうした目録に掲載される図をみると、近世では、手書きによる行政用の図（三郷図・水帳付図・開発計画図など）や考証図（浪速古図など）、そして板行された図（都市図・瓦版など）などが挙げられている。また、近代以降では、民間用の地図を中心として、行政用の図など、様々な地図を掲載する。

現在、こうした機関の多くでは、ホームページ（以下、HP）上で蔵書資料の検索が可能となっている。単に蔵書を検索する以上に、例えば大阪府立図書館では「地図一覧」「大阪文献データベース」とする検索、貴重コレクションや過去の企画展を紹介するコーナーを設置している。大阪市立図書館でも「大阪市立図書館イメージ情報データベース」として「大阪の古地図・古文書」コーナーを設置しており、利用者へ便宜を図っている。また、刊行された近世以降の都市図については、国際日本文化研究センターのHPに設定されているデータベース「歴史的空間情報（所蔵地図）」が概略をみるものとして利用し易い。

二、大坂三郷町絵図リスト

文化三年図の描写範囲や注記が三郷図とほぼ一致すると指摘したのは矢守（矢守寛書）である。佐古（一九二四）は板行大坂図の地名を検討する過程で三郷図に言及する。このように三郷図への言及は古くから認められ、その重



図1 京大附属図書館所蔵「大坂町絵図」、年欠、244.6×229.8 cm

※資料番号：分類5-84/都府5/都府60、表2では第⑧図に相当、この写真は上が東となる、色分凡例や市中や河口部の開発の程度により大凡の作成年が比定される（詳細な分析は今後に行う予定）

要性は広く認識される。しかし、それらの総目録は今までのところ整備されていない。どのような図が作られ、どのような役割を担っていたのか、全体像が明らかとなっていないのが現状である。肉筆の行政用都市図は、資料の残存状況など、板行図に比べて研究の推進に困難が伴う場合も多い。また、都市域の管理を目的として作られた地図であるため、近世の身分制社会そのものを表現する場合も多く、慎重な利用が求められる。しかし、矢守の指摘（矢守覚書）にもあるように、近世大坂の都市図を理解するうえで三郷図の検討は不可欠である。江戸の事例をみるまでもなく、多くの場合、行政用の地図が民間の地図の形を先導していたからである。つまり、三郷図が近世大坂の都市図の骨格であったとみなせる。それを示すように、三郷図のはじまりは板行大坂図より古い。

これまで三郷図についてまとまった研究が行われる機会は殆どなかった。三郷図の研究を進めるうえで、その所在確認が基礎作業として求められる。近世において三郷図は

表1 大坂三郷町絵図一覽(暫定)

No	所蔵(番号)	年 紀	法 量 cm	備 考	区 別	旧 蔵
①	国立国会図書館 (天守閣紀要11)	承応3-寛文5 (天守閣紀要11)	394×382(地名)	「大坂町中並村々絵図」		
②	大阪歴史博物館 (歴6140)	明暦-万治 (天守閣紀要9・13)	235.7×213.5(慶)	旧大阪史編纂係蔵本(附図目次①/ 7尺1寸×7尺8寸5分)?; 未定 稿215.4×235.4?	無	大阪北区役所 (←北組)
③	大坂城天守閣	明暦-万治(慶)		上図の写し(明治42年/大阪市総務 課市史編纂掛)を所蔵(慶)		
④	大阪市史編纂所 (市史談)	慶安-万治(未定稿); 明暦元(天守閣図録)	218.2×240.3(未定稿)/ 217.1×236.2(鳴)	旧大阪史編纂係蔵本; 寛文3-延宝 5 模写(附図目次②/7尺1寸8分 ×7尺9寸)?	北・南	北組
⑤	大坂城天守閣	明暦元(天守閣図録)	212.0×236.0(天守閣 図録)	上図の写し		
⑥	関西大学	貞享5, 7(関大目録)	115×130(関大目録)	「貞享大阪市中古写図」(関大目録)		
⑦	所在不明	元禄元-10 (未定稿/附図目次)	264.5×280.3(未定稿)	旧大阪府立博物館蔵本(附図目次③ /8尺7寸×8尺7寸)	三郷	
⑧	京都大学附属図 書館(分類5-84/ 都府5/都府60)	17世紀後半(鳴)	244.6×229.8(鳴)	紙背題箋「安政六年十月十四日改之 大坂町絵図二〇印」; 附図目次③に 同じ?; 「京都帝国大学図書館印」 (1902(明治35)年7月15日購入)	三郷	
⑨	大坂城天守閣	元禄7-12(天守閣図録)	96.0×94.0(天守閣図 録)/94.1×94.7(慶)	旧大阪史編纂係蔵本(附図目次④/ 3尺1寸7分×3尺1寸/元禄11- 宝永4)?; 旧大阪史編纂所蔵(未定 稿/96.4×94.8/元禄11-享保7/三 郷有)?	無	
⑩	慶応義塾図書館 幸田文庫	享保-元文(慶)	139×147(慶)	旧幸田成友蔵本; 元文頃に書写; 寛 政期に追記(安永・天明の情報)	三郷	北組
⑪	大阪市史編纂所 (市史談)	延享-明和(未定稿); 享保19, 12(附図)	165.4×142.4(未定稿)/ 164.0×141.8(鳴)	旧幸田成友蔵本; 附図目次⑤(4尺 9寸×4尺9寸)?	無	北組

⑫	所在不明	延享・明和(未定稿)； 享保19, 12(附图)	4尺9寸×4尺9寸 (附图目次)	旧森本専助蔵本；附图目次⑤(4尺9寸×4尺9寸)		南組
⑬	大阪市立中央図書館(書誌 ID00080349716)	延享・明和(未定稿)	95.4×99.1(未定稿)/ 94.9×98.8(嶋)	旧大阪史編纂所蔵本；「官正大阪図」 (未定稿)；「渡邊庫」印(旧菅原吉賢蔵本)あり		三郷
⑭	大阪城天守閣	明和4(天守閣紀要15)	129.7×133.9(天守閣紀要15)	(旧岡島佐一郎蔵)		
⑮	一橋大学図書館 蔵幸田成友博士 旧蔵書(Qf10)	明和4以降(一橋)	83×75(一橋)	旧幸田成友旧蔵		
⑯	大阪府立中之島 図書館(370-268)	安永以降(中之島目録)	97×93(中之島目録)	「大阪町小絵図」(中之島目録)		三郷
⑰	所在不明	天明3-天保9(未定稿)	257.6×274.2(未定稿)			無
⑱	大阪人權博物館	天明9-14年8(渡)	230.5×258.0(渡)	(旧出口神曉蔵本)		北・南
⑲	大阪府立中之島 図書館(甲和265)	天保11附图(12未定稿)-； 天保8前後(渡)	260.6×220.3(未定稿)	「大阪町絵図」(未定稿)；旧大阪府立 図書館蔵；附图目次⑥(8尺6寸× 7尺3寸)；鹿田静七氏寄贈		三郷
⑳	大阪府立中之島 図書館(甲維113)		274×172(中之島増加)			三郷

※項目：「所蔵」は現在の所蔵機関(カッコ内は請求番号)；「年紀」は推定される年紀(カッコ内は典拠；ただし西暦は煩雑になるため省略)；「法量」は資料の大きさ(カッコ内は典拠)；「備考」の鍵括弧は表題が大坂三郷町絵図以外のもの、旧何々蔵本は未定稿・附图目次の記載(カッコ内蔵は別)、附图目次○数字は附图目次の掲載図、丸カッコ内は別のデータ；「区別」は三郷の区別の有無；「旧蔵」は近世の所蔵状況；「？」は確認できないもの。

※典拠(丸カッコ内)：(天守閣紀要)は『大阪城天守閣紀要』；(地名)は『大阪府の地名』；(蔵)は『慶應義塾図書館蔵大阪町絵図』；(市史談)は『大阪市史編纂所所長堀田晩生氏による教示』(附图目次)は『大阪市史附图目次及解説』；(未定稿)は『大阪市史引用書解題未定稿(上)』；(天守閣目録)は『大坂再生——徳川幕府の大坂城再築と都市の復興』；(関大目録)は『関西大学所蔵大阪関係資料目録』；(嶋)は筆者調査；(一橋)は『幸田文庫目録』(一橋大学附属図書館HPより「幸田成友博士旧蔵書」蔵書リスト)；(中之島目録)は『大阪府立図書館蔵 大阪地図目録』など；(渡辺)は渡辺理絵論文；(中之島増加)は『大阪府立中之島図書館 増加図書目録』※図版(全体)が掲載されるもの：⑫は『江戸時代図誌 第三巻 大坂』8-9頁および『日本古地図大図』178-179頁；⑬は『大坂再生——徳川幕府の大坂城再築と都市の復興』59頁；⑭は『大坂再生——徳川幕府の大坂城再築と都市の復興』11頁；⑯は『慶應義塾図書館蔵大阪町絵図』。

管理者である奉行所や惣会所などに備えられるものであった。また、書写されて市中に出る場合もあったであろう。しかし、現用当時の所蔵状況を示す資料は確認されていない。それでは、これまでどのような目録が部分的にどれ整備されたのであろうか。日本初の市史として『大阪市史』の編纂が明治三四（一九〇一）年より開始された。この時、幸田成友を中心とする資料調査を通じて三郷図の情報も集められる。今のところこれより遡るリストは確認できない。その成果は『大阪市史附図目次及解説』（一九六五）や『大阪市史引用書解題未定稿（上）』（二〇〇二）にみられる（表一）。それには前者で五図（計六枚、②④⑥⑧⑩⑫⑭）、後者で八図（計九枚、前者十⑬⑮）を紹介する。しかし、そのリストは残念ながら現状と異なる点が多い。修史事業の終わりとともに収集資料が幾度となく移管されたことによる。また、当時、編纂所所蔵以外の、特に個人蔵の図で所在の確認できないものがある。

三郷図の研究を進めることは今後の大きな課題である。作成の主体や目的など検討すべき基本的な課題は多く残されているが、本節ではそれに至る基礎作業として三郷図リストを準備することとした（表一）。この表は、前記の幸田らによるリストと、近年、三郷図の所在を確認した渡辺（二〇〇四）の成果（計一二図）を参考に、データの補訂や追加を行い作成した。所在確認の多くは、表の注記のように各機関の所蔵資料目録やHP上での資料検索機能を利用している。一部の調査は実施したもの、まだ今後の作業にまつところが多くリストの内容は暫定的である。今のところ確認できた資料は、所在が不明や未見の図も含め計二十点にのぼる。今後調査を進めればさらに点数が増えると予想される。三郷図の分析は今後に譲るが、これらの図はおおよそ次の時期に区分されることだけ指摘しておきたい。作成された時期は、一六五〇年代（①⑤）、一六八〇年代（⑥⑧）、一六九〇年代（⑨）、一七二〇年代前後（⑩）、一七五〇年代前後（⑪⑬）、一七七〇年代（⑫）、一八四〇年代前後（⑭⑮）であった。一七

世紀後半に集中し、後期になるに従って間隔のひらく傾向を確認できる。

こうした大坂の町を描く手書きの地図は三郷図に限らない。大阪歴史博物館所蔵「大坂中之島図」(八木、二〇〇四)や「長堀ヨリ道頓堀マデ西横堀西之図」(大阪市立博物館、一九九〇)、福山城博物館蔵「御家中屋敷割図」(宮本、一九八九)など、最後に触れる水帳をはじめ、武家地の地図、蔵屋敷の地図、町人地の地図など、様々に確認される。それらも含めて体系的に手書きの大坂図を検討する必要があると考えている。

三、板行大坂図におけるひとつの画期——大岡尚賢(幕二)について——

先述のように板行大坂図の総目録は整備されていない。今のところ佐古慶三による詳細な解説(一九二四)のよりに図を紹介したものや、図書館や博物館などの機関の刊行する所蔵資料目録があるのみである。板行大坂図の総目録の整備が待たれる。

さて、近世の板行大坂図にみられる画期の研究は栗田元次(一九五二)にはじまる。それは地図を刊行する版元の変化に着目したものであり、その有効性は今も変わらない。それによると京都の林吉永による第一期(二六五〇—七〇代頃)、大坂の書肆(主に野村長兵衛)に移行していく第二期(二六八〇—一七七〇代頃)、そして大坂の播磨屋九兵衛を中心とする第三期(一七八〇代以降)となっている。それはいわば画期の外枠を示したもので、刊行された地図自体の内実を明らかにするものではない。しかし、板行大坂図はこうした画期を経ながら次第に正確な地図へと概ね変化していく。この正確な地図へという変化は三都のなかで大坂に著しい現象と考えている。例えば江戸の場合、地図の正確さはむしろ後期になるに従って後退していくと指摘される。

表2 大岡尚賢(藤二)が作成に関わった地図

種別	年月	タイトル	作成者	版元ほか	法量 cm	出典・所蔵
板 行 図	享和2(1802) 年9月	摂河州水損 村々改正図	作者図工 吉田作治郎;大岡 尚賢誌	亀喜堂発行; 赤松九兵衛/柳 原喜兵衛/大西 甚千/高橋平助		『奥田コレ クション』
	年欠	摂河州水損 村々改正図 全	御絵図師大岡藤二門人 吉田 作次郎図(「大岡尚賢誌」の 記述がない);上に同じ	大坂谷町二丁 目/亀屋喜兵 衛		豊中市社会 教育課蔵
	文化3(1806) 年3月彫成	増修改正摂 州大阪地図	絵図師 大岡尚賢訂正/法橋岡 田玉山写図/曾之唯補正/赤松 善応校/南方惺惺書/小林平八 鑄字;難波の隠士沢田翁の元図	浪華書屋 赤 松九兵衛発行		
	天保15(1844) 年8月再鑄	増修改正摂 州大阪地図	絵図師 藤村直之訂正/浪速 岡田玉山元図/吉田政章再写 /京都 樋口與兵衛鑄字	赤松九兵衛発 行		
	文政8(1825) 年9月発兌	文政新改摂 州大阪全図	浪華 蔀関牛写図/同 赤松善 応校正/浪華 川瀬五一郎鑄 字/絵図師 大岡藤二方省	播磨屋九兵衛		
	天保8(1837) 年9月	天保新改摂 州大阪全図	浪華 蔀関牛写図/赤松善 応校正/樋口與兵衛鑄/御絵図 師 大岡藤二方省	播磨屋九兵衛		
	弘化丁未 (1847)年捌刻 成	弘化新改摂 州大阪全図	蔀関牛写図/赤松善 応校正/ 森川宝珀堂鑄	播磨屋九兵衛 /河内屋太助/ 河内屋政七/ 伊丹屋善兵衛 /蹟典堂蔵板		
	幕末期	火消組合 大阪町名絵 図	大岡藤二絵図師/男 大岡青 吉改製	神崎屋金四郎	43.4×88.7	大阪市中央 図書館蔵
手 書 図	享和2(1802) 年3月写	浪速古図證 歌附 大岡 控之図	大岡尚賢藤二写	大坂町奉行 (東)水野忠道 の命により作 成した写図の 控	5 袋(袋入): 四枚之内一 61.3×27.4; 二62.0×27.4; 三53.5×41.6; 四106.1×61.9/ 148.6×45.7	大阪市中央 図書館蔵
	寛政4(1792) 年6月	本庄山山論 済口絵図	絵師大岡藤二(大坂徳井町); 檢使(御改此度用瀬善蔵・関 矢石右衛門)		161.5×255.5	西畑町内会 管理文書等
	享和2(1802) 年5月	船岡山論 所絵図	絵図師大岡藤二;代弟子植本 真吾		173.4×175.4	『新修泉佐野 市史』13巻

※出典のうち図版やその書誌情報が比較的よく掲載されるものについては省略した。
それらはいずれも文末の文献リストに掲載する資料を参考にする。

矢守覚書はこの
画期について文化
三年図に注目し、
第三期の変化の内
実に迫ろうとした。
そのなかで文化三
年図の作成スタッ
フに注目する。文
化三年図には作成
に関わった人物と
その役割を明記す
る(表二)。この
うち「絵図師」と
して地図の作成に
関わったと目され
る大岡尚賢につい
ては詳細を不明と

した。この大岡については、佐古慶三の指摘（一九七〇）や「享保以後大阪出版書籍目録」により、「文政新改撰州大阪全図」の作成に関わること、徳井町に居住する「御絵図師」で、藤二とも称したことを指摘するのみである。そのかわりに曾之唯（曾谷学川など）による天明三（一七八三）年の序文に登場する「澤田翁」という人物に焦点をあてた。それはこの文化三年図が澤田翁の「浪華地図」を原本としたと記すからである。そして矢守はそれまで佐古（一九七〇）によって「図絵師」「難波丸項目」や「精地理」「浪華郷友録」とだけわかつていた澤田呂少（貞矩など）について、新しい知見を得たことで文化三年図の画期に関わる人物と評価した。それは澤田呂少が森幸安の門弟であったという事実である。ではなぜ森幸安の門弟であるという事実を重視したのであるか。ひとつには先に触れた三郷図と文化三年図の類似に注目するからである。三郷図は行政用として同時代の板行図よりも優れた地図として存在していた。森幸安は多くの大坂図を書写しており、その過程で三郷図をみた可能性も指摘されている。そうしたことから澤田翁を紐帯として文化三年図と三郷図を結びつけられると考えた。そして、ふたつめには文化三年図の実測図としての側面である。文化三年図では市中周囲の村々をも詳しく描いており、その理由を澤田翁による測量の故とした。森幸安の門弟であれば測量の技術を有していたという理由である。

このように第三期の板行大坂図の特徴のひとつは、測量への関心の高まりにあった。文化三年図とともに第三期のはじまりを告げた寛政九（一七九七）年「増修大坂指掌図」は、「分間例」として「二分二十四間：（省略）：九寸一里」として図の縮尺値（一四四〇〇分一）を例示するとともに、一町を示す二分五厘の方格線がひかれ、そうした特徴をうかがい知れる。こうした測量との関連から地図の歴史をみとおすことは重要であり、板行江戸図と北条氏長や遠近道印などのように、実測の有無も板行都市図の表現を変える画期の一要素となるからである。ただ

し、筆者は文化三年図の正確さを澤田翁のみに帰するとは考えていない。むしろこの点について「絵図師」と記される大岡尚賢の役割に注目する。それは、筆者のこれまでの調査によって尚賢は測量術家としても注目すべき成果をあげていることが確認されたからである。

大岡尚賢は藤二とも称する。それは享和二（一八〇二）年三月に大岡によって書写された「浪速古図證歌附」（大坂市立中央図書館蔵）に確認される。この五枚からなる図は大坂町奉行（東）水野忠道の命によって大岡が浪速古図を書き写した際の控えである。そのうちの一枚に「依命／水野若狭守様享和二年壬戌月上覽／大岡尚賢藤二写」と記されている。後にも触れるように尚賢は大坂町奉行所付の御用絵図師として活動する人物であった。それは表二のいくつかの図で「御」絵図師と記されていることにも示される。この尚賢は文化三年図のほか、いくつかの板行図にも名前を確認でき、その活躍が知られる（表二）。享和二（一八〇二）年「撰河州水損村々改正図」、文政八（一八二五）年「文政新改撰州大阪全図」（天保版も）、幕末期の「火消組合 大阪町名絵図」が今のところ確認できた図である。それらの図をみると尚賢には門弟が存在し、一派を形成したようにもうかがえる。尚賢は大岡姓を名乗ることから、狩野派系の画人として近世大坂画壇で大きな位置を占めた大岡派とのゆかりも想定されるが、この点はよく分からない。そして、一八四〇年代以降に出版された天保版の「増修改正撰州大阪地図」や「弘化新改撰州大阪全図」になると、その名前が確認されなくなる。

この大岡尚賢は板行図の絵図師である一方、実は市中周辺の村々の論所図の作成にも関わっていた。今のところ、ふたつの事例が確認される。撰津国豊島郡の山論を扱った寛政四（一七九二）年「本庄山山論済口絵図」、和泉国日根郡の山論を扱った享和二（一八〇二）年「船岡山論論所絵図」であり、大坂町奉行が管轄する案件であった



図2 「覚 山論立会絵図手附銀受取」寛政11 (1799) 年11月
 明治大学博物館所蔵嘉祥寺文書 (甲50/S/720)

※大岡藤二による受け取りの印(「大岡之印」)が確認される

(表二)。尚賢はそれら論所見分絵図(前者)と立会絵図(後者)の作成に絵師として関わり、特に後者の場合、弟子とともに論所を測量したことが資料よりうかがえる⁽¹⁾。さらに注目されるのは、両図における方位角の分割の仕方が異なることである。近世の方位磁石盤の多くは一二支を用いて方位角を分割(一支は三〇度)している。そのうち前者は一支を一〇等分する三度角の単位で計測したのに対し、後者は一支を三〇等分する一度角と精度が向上する。それぞれの計測値から判断して前者は「小丸」、後者は「小方儀」と呼ばれる方位磁石盤の使用が想定される。同時代的にみてもこの在地の小方儀の使用はかなり早い(鳴海、印刷中)。ちなみに小丸は一七世紀後半以降、百年以上もの間広く日本に普及していたコンパスであり、小方儀は伊能忠敬らが全国測量の際に通常使用したものである。尚賢のこうした進歩的な測量術家としての側面は、大坂町奉行所付きの御用絵図師として、文化二(一八〇五)年に大坂入りした伊能忠敬を、

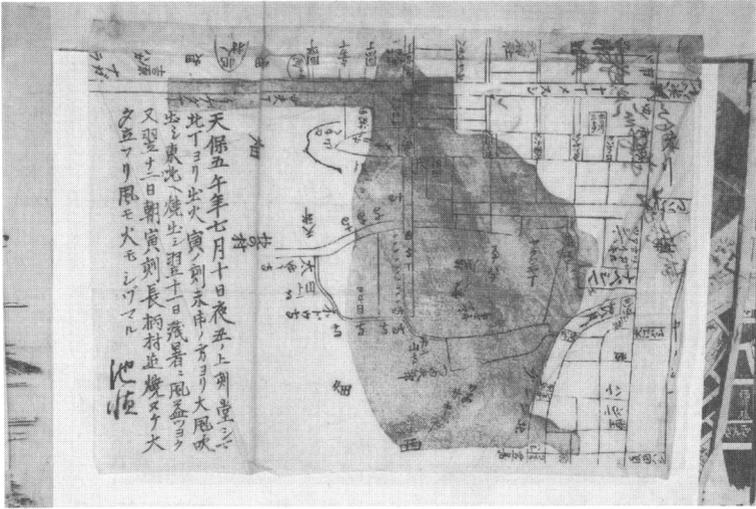


図3 「緑頭集」(貼込帳)より「[大坂大火図]」、33.7×24.9 cm
 滋賀ハコレクション (大阪大学大学院文学研究科日本史研究室蔵)

※ 天保5年7月10日火災発生、堂島川北岸

麻田剛立や間重富らとともに出迎えていたという交流関係にも示唆される。つまり、尚賢は当時の測量術を体得した絵師であったとみなせそうである。このことから文化三年図に認められる実測図としての側面は尚賢の存在に由来するものもあったと考えたい。この文化三年図は図郭の外側に郊外の山々を鳥瞰図的に描く趣向をこらす。そのうち北には箕面山や池田の山並みを描くが、実際にその地の論所に尚賢が派遣されて測量図を作っていたことは注目される。

板行大坂図の表現を変えていく画期は様々に存在したはずであるが内実はほとんど知られていない。ここでみた大岡尚賢の事例は今後さらに詳しい検討が必要であるが、こうした画期をみていくうえで、市中のみならず周辺地域の多様な資料をみることも、また、測量という視点が有効であることを示している。

むすびにかえて

これまで三郷図と文化三年図について若干の検討を試みてきた。しかし、近世の都市図はこれ以外の種類の地図も含むし、近代以降も大量に作成される。これまでこうした都市の地図を体系的に議論した研究は乏しく、「都市図」というジャンルを定義する必要があると考えている。例えば本学にも次の資料が所蔵されており、それらも都市図に含まれるものである。

ひとつ目は都市災害図である。文学研究科日本史研究室に所蔵される「滋賀八コレクション」(大阪大学文学部国史研究室編、一九八一)や「難波家(平野屋)史料」(大阪大学文学部日本史研究室編、一九九八)は近世の貼込帳を多く含んでいる。この貼込帳とは現在のスクラップブックに相当し、一枚刷の類を貼り交ぜ集めたものである。近世後期には大坂の町人も好んで作成したといい、彼らが注目した都市情報の一端をうかがい知れる。その中には多くの地図や地誌的な刷物を含んでおり、都市災害を速報した瓦版も多い。図三は、そのうちの一冊である「綴頭集」(滋賀八コレクション)に貼られた「大坂大火図」であり、これ以外にも多くの都市災害図を収める。こうした近世大坂の大火図(焼場図)をみわたすには大阪市立博物館(現大阪歴史博物館)による資料集(一九九八)が便利である。

近世の災害図については北原(二〇〇三)に詳しく貼込帳の事例も取り上げている。しかし、それ自体を論じるものではなく、貼込帳の研究は意外にも乏しい。瓦版の地図とともに、都市情報を集積する貼込帳の存在も興味深い。なお、この種の瓦版の閲覧や検索は、デジタルアーカイブ「小野秀雄コレクション」(東京大学大学院情報学環

・学際情報学府HP内)や東京大学史料編纂所HPデータベース「摺物データベース」などが利用しやすい。

また、ふたつ目は水帳およびその付図である。本学の経済学研究科経済史・経営史研究室には、大坂の北船場を中心とした地域(北組・南組)の水帳七九冊と付図二五枚が所蔵されている(大阪大学経済学部経済史・経営史研究室一九七八)。安政三(一八五六)年のものが多い。水帳類は大阪大学以外の機関にも多数所蔵され、その一覽をうかがうには「大坂水帳所在目録」(仲田、一九六六)が便利である。これらの資料は都市の検地帳であり、町人地や居住する住人の管理の基礎資料として作成された。かつては町奉行所・惣会所・町内に保管されたという。それは、元和以来、度々改正され、安政三年度が再末期となる。この水帳については、その改正(明暦段階)が三郷図作成の背景として存在したと論じる視点もある(矢内、一九八三)。この水帳を用いて町を復元することの有効性は古くから認識されており、すでに個別的な復元は試みられている(原田ら、一九八〇など)。今後は近年著しい発展をみせるGISを活用しながら、統合的、重層的に復元することが期待される。

本学の資料の紹介を通じて、やや羅列的に都市図の一部をみてきた。このような都市図を位置付けていくことは、都市大阪の環境変化の歴史をたどることと重なると考えている。近代以降の都市計画やその整備、おおさか域の拡大や大規模な開発事業など、これらに関わる図面は大阪の都市図を最も特徴付けるものである。例えば、近代における淀川や大阪湾の改修、現代における郊外のニュータウン開発などは、大阪をダイナミックに変化させる大規模な事業であるとともに、その当時の最新の技術と思想を体言するものであった。これらに関わる資料は、先にみた機関以外にも、例えば、淀川史料館や大阪府立公文書館においても所蔵されており、それぞれのHP内で資料検索が可能となっている。こうした資料をも含みながら大阪の地図の全体像をみていく必要があるであろう。

注

- (1) 嘉祥寺村文書「寛 山論立会絵図手附銀受取」寛政二一(一七九九)年、明治大学博物館所蔵。②同「為取替一札 相絵図絵師旅宿等二付入用割方」寛政二一(一八〇〇)年三月二九日、同。③同「山論二付分見双方立会合帳」文化三(一八〇六)年二月、同など。ただし②の資料中では「大岡藤治」と記す。

文献

- 飯田龍一・俵元昭(一九八八)『江戸図の歴史』および「別冊江戸図総覧」築地書館。
 泉佐野市史編さん委員会編(一九九九)『新修泉佐野市史 第一三巻絵図地区編(解説)』・同(絵図集) 泉佐野市。
 岩田豊樹(一九八〇)『日本書誌学体系一 江戸圖總目録』青雲堂書店。
 内田九州男(一九八二)「一三〇 承応二年大坂三郷町絵図(写)」『大阪城天守閣紀要』九、七・一三一―一四頁。
 内田九州男(一九八三)「二 大坂町中並村々絵図」『大阪城天守閣紀要』一一、一五頁。
 内田九州男(一九八七)「その他 K 地区・絵図」『大阪城天守閣紀要』一五、一四頁。
 大阪市史編纂所編(二〇〇二)『大阪市史史料第五九輯 大阪市史引用書解題未定稿(上)』および「同六十輯 同(下)」
 大阪市史編纂所。
 大阪商業大学商業史研究所編(一九九二)『大阪商業大学商業史研究所資料目録第一集』大阪商業大学商業史研究所。
 大阪城天守閣編(二〇〇二)『大坂再生―徳川幕府の大坂城再築と都市の復興』大阪城天守閣特別事業委員会。
 大阪市立中央図書館編(一九八三)・(一九八八)『大阪市立中央図書館蔵書目録第一五巻郷土資料編』・『大阪関係地区目録』大阪市立中央図書館。
 大阪市立博物館編(一九九〇)・(一九九八)・(一九九二)『大阪市立博物館 館蔵資料集一七 奥田コレクション―地図・絵図―』・「同二五 近世大坂の災害関係資料 I ―火災―」・『大阪市立博物館館蔵品目録』大阪市立博物館。
 大阪市役所蔵版(一九一三、一九六五復刻)『大阪市史附図目次及解説』清文堂。
 大阪人権博物館編(二〇〇一)・(同)『第五一回特別展図録 絵図に描かれた被差別民』・『大阪人権博物館調査報告書第

三集 絵図の世界と被差別民 大阪人權博物館。

大阪大学経済学部経済史・経営史研究室（一九七八）「大坂市中の人別帳・水帳目録」「大阪大学経済学」二八（一）、

一一〇—一一六頁。

大阪大学文学部国史研究室編（一九八一）「滋賀屋八兵衛コレクション目録」大阪大学文学部国史研究室。

大阪大学文学部日本史研究室編（一九九八）「難波家（平野屋）史料目録」和泉書院。

大阪図書出版業組合（一九三六、一九六四復刻）「享保以後大阪出版書籍目録」清文堂

大阪府立図書館編（一九六二）（一九六三）（同）（一九七二）「大阪府立図書館シリーズ第五輯 大阪府立図書館蔵大

阪地目録——江戸時代から現在まで——」同七輯 大阪府公共図書館 郷土資料総合目録・「同八輯 大阪府立図書

館蔵稀書解題目録 和漢書の部」大阪府立図書館 蔵書目録 和漢書第七巻」大阪府立図書館。

大阪府立図書館編（一九六九—一九七四）「大阪府立図書館 増加図書目録 昭和四二年度—四七年度」大阪府立図書館。

大阪府立中之島図書館編（一九七五—一九九二）「大阪府立中之島図書館 増加図書目録 昭和四八年度—平成元年度」

大阪府立中之島図書館。

大阪府立中之島・夕陽丘図書館編（一九九二—一九九八）「大阪府立中之島・夕陽丘図書館 増加図書目録 平成二年度

一八年度」大阪府立中之島・夕陽丘図書館。

大塚隆（一九八一）「日本書誌学大系一八 京都圖總目録」青裳堂書店。

岡本良一編（一九七六）「江戸時代図誌 第三巻 大坂 大坂」筑摩書房。

小田忠（二〇〇一）「庶民は地図を利用したか」「地域と社会」四、一八七—二〇二頁。

片山良爾（一九八三）「大阪市立中央図書館蔵書目録 第一五巻 郷土資料編」大阪市立中央図書館。

関西大学図書館編（一九六〇）「関西大学図書館シリーズ六 関西大学所蔵大阪関係資料目録」関西大学図書館。

北原糸子（二〇〇三）「近世災害情報論」塙書房。

栗田元次（一九五二）「日本における古刊都市図」「名古屋大学文学部研究論集Ⅱ」史学一、一一—一三頁。

金田章裕代表編（二〇〇一）「京都大学所蔵古地図目録」京都大学大学院文学研究科。

- 佐古慶三編(一九二四)「古版大坂地図解説」だるまや書店。
- 佐古慶三(一九七〇)「古版大坂地図集成に就いて」清文堂。
- 白石克執筆担当(一九九二)「文献シリーズ二一 慶應義塾図書館蔵大阪町絵図」慶應義塾三田情報センター。
- 玉置豊次郎(一九八〇)「大阪建設史夜話 附・大阪古地図集成解説」大阪都市協会。
- 辻田晃一・森洋久編著(二〇〇三)「日文研叢書二九 森幸安の描いた地図」国際日本文化研究センター。
- 千葉興企画部広報員課編(一九八八)「千葉縣史史料 近世編 伊能忠敬測量日記」千葉県。
- 仲田喜弘(一九六六)「大坂水帳所在目録」大阪府立図書館紀要二、七三―八九頁。
- 中村拓監(一九七二)「日本古地図大成」講談社。
- 中村拓監・海野一隆・織田武雄・室賀信夫編(一九七二)「日本古地図大成——解説」講談社。
- 鳴海邦臣(印刷中)「近世日本の地図と測量——村と「廻り検地」——」九州大学出版会。
- 早川秋子(二〇〇三)「近世家並帳の研究」清文堂。
- 原田伴彦・矢守一彦・矢内昭(一九八〇)「大阪古地図物語」毎日新聞社。
- 平凡社地方資料センター編(一九八六)「大阪府の地名Ⅱ」平凡社。
- 豆谷浩之(二〇〇四)「十七世紀中葉における諸藩の大坂屋敷について——「大坂三郷町絵図」を中心に——」大阪歴史博物館研究紀要三、二二―三七頁。
- 宮本雅明(一九八九)「大坂三郷町絵図の世界」大阪府都市住宅史編集委員会編「まちに住まう」平凡社、一一七―一二二頁。
- 村上紀夫(二〇〇二)「絵図被差別身分記載——大阪人権博物館第五一回特別展を通して——」歴史科学一六八、三九―四七頁。
- 矢内昭(一九八三)「大坂三郷の形成過程」大阪の歴史九、二二―三八頁。
- 八木滋(二〇〇四)「大坂中之島図」蔵屋敷関係資料——大阪歴史博物館研究紀要三、八七―九七頁。
- 安国良一(二〇〇五)「近世の災害情報と住友」住友史料館報三六、一一―三二頁。

矢守一彦（一九七四）「都市図の歴史——日本編」講談社。

矢守一彦（一九八四）「増修改正大阪地図」に関する覚え書き」および「地図史上の人物」「古地図と風景」筑摩書房、二〇〇四。

二〇〇四）「刊本以外の大坂図」「大坂三郷町絵図」に関する書誌学的検討」「懐徳」七二号、一八一—三二頁。

渡辺理絵（二〇〇四）「刊本以外の大坂図」「大坂三郷町絵図」に関する書誌学的検討」「懐徳」七二号、一八一—三二頁。

（付記）本稿は平成一七年度国立歴史民俗博物館共同研究「明治地籍図の集成的研究」（研究代表者：青山宏夫）および平成一八年度科学研究費補助金（若手研究B「日本近世の農村社会における土地測量の普及過程とその近代地籍測量への影響」研究代表者：鳴海邦匡）の一部を使用した。

（総合学術博物館助手）

SUMMARY

A Memo about the City Plans of Osaka in the Edo Period

Kunitada NARUMI

Edo, Kyoto, and Osaka were the three major cities of the Edo period that were under the direct control of the Edo shogunate. Many of these city plans were published commercially. These plans were printed on woodblocks and distributed among tradesmen, artisans, and samurai who resided in or visited these cities. Among the three cities, the published city plans of Kyoto are the oldest, while those of Edo are the most numerous. As a result, the city plans of Kyoto and Edo have been studied extensively thus far.

With regard to the city plans of Osaka, it has been pointed out that the medium in which these were expressed changed radically more than three times. This was because these three changes were fundamentally influenced by the publishers. Although, initially, the publishers in Kyoto were generating the maps of Osaka, the publishers in Osaka gradually started generating maps after the end of the seventeenth century. However, the publishers' changes were merely peripheral, and the reality of such changes is relatively unknown. Unlike the woodblock-printed plans of other two cities, the plans of Osaka were finalized gradually through the Edo period. This report introduces *Ooka Shoken*, the official painter at that time, and explores his connection with this third change. In this memo, it is mentioned for the first time that *Ooka Shoken* was a painter who possessed survey skills.

However, the foundations of city plans were comparatively more similar to manuscripts of administration plans than to commercial woodblock-printed plans. In Osaka, the handwritten plans for administration were frequently prepared after the middle of the seventeenth century. It is a phenomenon that cannot be observed in Edo or Kyoto. When constructing the definition of a city plan, I think that it is essential to incorporate both handwritten and printed city plans.

キーワード：都市図，大坂三郷町絵図，板行図，測量，三都